

世界には見えないアフリカの政治：何故ナイジェリアが兵隊の樂園なのか

Counter Punch, 2024年8月14日

ダニエル・ファルコーネ（アメリカ民主社会主義者党員で、世界史研究者）著、脇浜義明訳、田中一弘補訳

*脚注は訳注



Image by Road Ahead

「軍隊を文民政治から排除したいなら、他の方法を人々に提供しなければなりません。」と学者は主張する。

1800年後半から始まった英国の統治はナイジェリアに大きな影響、主として帝国主義の経済的、政治的、文化的形態という破壊的影響を与えた。その影響は今でも、特に法律機構や社会機構に見られる。法律史研究家のサミュエル・フューリー・チャイルズ・デイリーは『兵隊の樂園：帝国主義後のアフリカの軍国主義化』(Soldier's Paradise: Militarism in Africa After Empire。2024年10月に Duke University Press から出版予定)の著者である。この本は「一つの政治思想、イデオロギーとしての軍国主義について述べたもの」と著者は説明している。デイリーは裁判記録と私文書からの直接資料を導入して、「法が軍国主義を可能にすると同時にそれに反対するという両方の役割を果たした」ことを実証している。デイリーによれば、法的枠組みこそが「脱植民地化の緊張と矛盾ー独立は必ずしも自由を意味しなかったし、自由には軍国主義的性格があった」ことを観測できる最適の観点となる。デイリーの作品はアフリカ大陸で軍国主義が台頭し続けている時期に生まれ、軍国主義の持続的影響を分析している作品である。

ダニエル・ファルコーネ：私はあなたが何故このトピックに関心を持ったのかをお尋ねしたいと思います。どういふいきさつでああなたの研究活動からアフリカの軍国主義という本を書くことになったのか、ご説明願います。

サミュエル・フューリー・チャイルズ・デイリー：生来私は自分が直観的に理解できない問題、恐ろしくて手ごわいものに惹かれる性格なのです。軍国主義がそういうものの一つです。私が政治参加できる成人になったのはイラク戦争の頃でした。当時米国社会は、何のためか分からない戦争、私が賛成できない戦争に夢中になっているの

を見て、考えさせられました。そのことから、軍国主義が国民の心を捕らえていくことについて考え始め、それがずっと続いたのです。

いったい人々は軍国主義のどこが気に入るのか、私には理解困難な問題ですが、これまで私が書いてきたものの多くは、それに答える試みでした。最初の本は1960年代のナイジェリア内戦、別名ビアフラ戦争¹に関するもので、戦争が人々の日常の思考や行動に及ぼす影響を論じた本です。20世紀後半にナイジェリア的犯罪と呼ばれた犯罪形態、例えば、武器を使った犯罪や419詐欺²はあの内戦から生まれたのです。戦乱の不安定な状況の中で生き延びようとして、人々は犯罪的手段を使うのです。戦争が暴力犯罪や人を騙す行為を標準化し、しかもそれは戦争が終わった後も長く続くのです。

軍国主義の影響を論ずるうえでナイジェリアが最適な場所に思えました。何故なら、ナイジェリアは軍による統治を長く経験した国だからです。1966年から1999年まで、一時中断がありましたが、ほぼ30年間軍事独裁でした。その歴史の傷跡は、いつも日常生活の中で見えました。私が軍服など制服の権力を知ったのは、大学在学中にナイジェリアへ言ったときです。一番最初に気が付いたのは、制服を来ている人がやたらと多かったことでした。兵士や警官だけでなく、あらゆる職業の人が制服を着ていたのです。民兵や若者集団のきついピンク色や明るい青い色の制服など、考えられる限り様々な迷彩を施した制服を見ました。市民団体も制服を採用していました。

ある日私は、普通の大量生産される、何か肩章のついた、Tシャツ姿で町を歩いていたら、警官に呼び止められ、Tシャツを脱がされて、没収されそうになりました。肩章が私には相応しくない高い軍人の地位の肩章に似ていたからです。この経験で、私は、当時はまだ軍政ではなかったナイジェリアで制服の持つ権力の強さを考えるようになったのです。さらに、私の国、米国についても考えました。当時米国人大衆はアンダーアーマー社のユニフォームやジャージを着て、クロスフィット社のフィットネス教室へ通って身体を鍛えるのが流行していました。軍国主義的風潮が米国にも浸透し始めているように見えたので、軍国主義的政治の長期的影響を研究するには、ナイジェリアが最適だと思ったのです。

ダニエル・ファルコーネ：あなたは新刊書で特にどんなことを論じ、それはアフリカの歴史と同じようなテーマの歴史研究とどのように関連しているのですか。

サミュエル・フューリー・チャイルズ・デイリー：『兵隊の楽園』は一つの政治思想、一つのイデオロギーとしての軍国主義を論じたものです。普通、軍国主義は20世紀の大きなイデオロギーと考えられることはありませんが、それは資本主義や共産主義と同じように重要なイデオロギーです。ある意味では資本主義や共産主義より一貫性があるイデオロギーと言えます。それは意味のある構造と一貫性がある原理を有しています。20世紀初め、世界の人民の多くは軍靴の下で苦勞しましたが、それは特にアフリカで顕著でした。私の本は軍国主義というイデオロギーがどういうものか、兵隊たちはいったん社会を征服したらどういう社会的ビジョンを持つのかを論じたものです。クーデターの首謀者や実際にクーデターを行った者たちはそれなりの社会的ビジョンを持っていました。あまり賛成できないビジョンであることが多かったのですが、私の本は軍国主義を政治体制として是認するものではないのももちろんですが、軍国主義者がそれなりの計画を持っていたのは事実です。

彼らは社会を軍隊的にデザインしたユートピアに出来ると思ったのです。彼らはそれを自由だと思ったのです。逆説的な言い方ですが、多くの兵士は自由は規律を通じてしか獲得できないと信じています。民間人の間にもそういう発想がありました。

私は法歴史研究者です。私は軍事政権が押しなべて信じているものの一つは、社会を変えるためには裁判所、判事、警察が必要だということを見ました。彼らは法律が規律のツールになると思ったのです。社会を軍隊式ユートピアに作り変えるうえで法律が役に立つと思ったのです。しかし、法は単なる規律のツール以上に複雑で、彼らは間違った判断をしたのです。やがて軍事政府は、法律が必ずしも自分たちの味方にならないことを、何度も思い知らされました。それでも、独立後の時代のアフリカ政治のスローガンは、多くの研究者や活動家が「自由」だと主張していますが、そうではなくて、「規律」(discipline)でした。規律を政治的イデオロギーと考えてアフリカ政治を見ると、独立後時代のアフリカの歴史と現実が理解しやすくなります。

ダニエル・ファルコーネ：現在のナイジェリアについて話してください。経済的、社会的、政治的な現在の現象がどのように作用して、あなたが本の中で書かれたような歴史の流れに乗って、現代ナイジェリアが形成されているのですか。それと、私はそのことが西アフリカの移民問題とどのように影響を与えているのかどうかにも関心が

¹ イボ族を主体とする東部州がビアフラ共和国として分離・独立したことから起こった内乱。

² メールや手紙で多額の配当を約束する投資を呼びかける詐欺。

あります。人権を奪われて差別されているアフリカ人民の態度や考え方をどうやって知ることができますか。また、規律の中から人民の主体性が生まれるのでしょうか。

サミュエル・フューリー・チャイルズ・デイリー：以下の3つに分けて答えます。

1) 私の本に「兵士の信条」という一章があります。規律こそが政治と人間的繁栄にとって一番大切だという信条です。ナイジェリア兵たちは、無法のティーンエイジャーだった自分たちを精悍な兵士に鍛え上げた規律を、国民にも適用できる政治哲学だと思ったのです。彼らは何でも好きなことをする自由は本当の自由ではないと主張します。多くの民族主義者が言った投票の自由とか表現の自由という進歩的自由も、兵士たちの規定する自由ではありません。彼らにとって、真の自由とは自己の本能の独裁から解放されることです。

2) 移民に関しては、独裁政治時代多くの人々はナイジェリアを捨てて移民する決心をしました。現在のナイジェリア移民が始まったのは軍事政権時代でした。過去には他のディアスポラがありました。最も大きいディアスポラは大西洋間奴隷貿易で奴隷として米州へ強制連行されたことです。他にも学生や船乗りとして外国へ出た英国植民地時代のディアスポラもあります。たくさんの人々が西アフリカを出て、大英帝国圏内を移動しました。しかし、大量のナイジェリア人が永久的に国を捨てるようになったのは、軍事政権のときです。米国内、例えばアトランタやヒューストンなどナイジェリア人コミュニティが出現したのは、ナイジェリアの軍事政権時代でした。このことは大変重要なことを示唆しています。すなわち、人民のみんながみんなイデオロギーとしての軍国主義に賛成したわけではなかったということ。兵士たちのビジョンに乗らない人々にはあまり多くの選択肢はなく、せいぜい移民として国を出るぐらいしかできません。最終的にどれだけのナイジェリア人が規律精神を身に着けたのでしょうか？ 簡単には答えられません。

3) 現在の政治に関しては、この数年間でアフリカ大陸で一連のクーデターがありました——ギニア、マリ、ニジェールなどで。この現象は、人々がアフリカでは軍事独裁政治時代は終わったと思ってから、長期間経って起きました。2000年代最初の10年間、ほとんどの軍人たちは政治の場を離れ、兵舎や軍隊に戻ってました。軍支配時代はもう終わったと、多分に楽観的に、思われていましたが、ここ数年間は、その考えが間違っていることを証明しました。軍はまだアフリカ政治の中に存在し、しかも重要勢力なのです。

この一連のクーデターは多くの人々にとって不意打ちでした。当然知るべき立場にあった人々も含め、クーデターを予測した人は非常に少なかった。一般に、評論家など観測筋は、ロシアの介入とか、フランスやその他西側大国の説明を待つか、あるいは内部問題として、軍人の給料問題だ、つまり、クーデターは軍隊内の兵士の待遇問題から起きたという説明をする。どちらにも一部の真理はあるが、どちらもそれ自体では完全な説明にはならない。軍事支配には深い歴史があり、私の本はそれを書いたのです。

ダニエル・ファルコーネ：何故西側は、ナイジェリアだろうが他の国だろうが、アフリカの軍国主義にもっときちんと対処するか、もっと深く理解していないのですか？ 世界には、アフリカの中や外で、人権に関する問題がたくさん起きています。中東、コンゴ民主共和国、ベネズエラ、バングラデシュ等々で。しかし、西アフリカ、とりわけナイジェリアは無視されていると思いませんか？

サミュエル・フューリー・チャイルズ・デイリー：それも大きい問題ですが、誰もよい答えを持っていないと思います。アフリカの政治はいつも世界には見えないのです。アウトサイダーがアフリカ政治に関わり、それを理解する唯一の道は、ただ見ることによってだけのようです——特にどこかの大国が舞台裏で糸を引くようなときです。1960年代、非常に多くの評論家は、アフリカのクーデターは基本的には外部の大国、米国、ソ連、フランス、英国などが操る事件だと説明しました。たしかに大国がアフリカの政治から目を離さず、場合によっては直接介入したのは、事実です。しかし、私が話しているクーデターの多く、とりわけナイジェリアのクーデターは、外国勢力の介入によって起きたものではありません。ナイジェリア社会の内部から生まれたのです。外国勢力の利益と一致することもあるかもしれませんが、外国が自分の利益のためにそそのかして起こしたクーデターではありません。この点では現在のアフリカ政治は、例えば米国が右翼軍事政権を支援するラテンアメリカとは異なっています。

アフリカでは軍事独裁政治は多くの場合民衆的支持があります。軍は一般民衆の欲望を利用するのが上手です。兵士にはカリスマ性があり、民衆はそのカリスマ性に惹かれています。

ダニエル・ファルコーネ：西アフリカの政治的思考と実践から軍国主義を一掃できると思いませんか？

サミュエル・フューリー・チャイルズ・デイリー：私は軍国主義が社会をまとめる良い方法だとは思いませんが、軍国主義がいつかどこかへ姿を消すとは思っていません。私は西アフリカ社会が今何をなすべきか何をなすべきでないかについては、まったく分かりませんが、毎日ナイジェリアのニュースを心配しながら追っています。今のところ、他の国で起きているクーデターの波に巻き込まれていませんが、起きる可能性はあります。文民政治に軍人を入れないようにするためには、人々が秩序と規律を感じる軍隊以外の方法を提供しなければなりません——

自分の生活を自分がコントロールしていると民衆が感じる方法を講じるべきです。それを無視すると危険を招くことになります。

ダニエル・ファルコーネは教師、ジャーナリストであり、ニューヨーク州ジャマイカのセント・ジョンズ大学の世界史プログラムの博士課程の学生であり、アメリカ民主社会主義者党のメンバーでもあります。彼はニューヨーク市に住んでいます。